

付 編

上ノ平城跡の変遷と虎口の破壊

長野県埋蔵文化財センター
河西 克造

1. はじめに

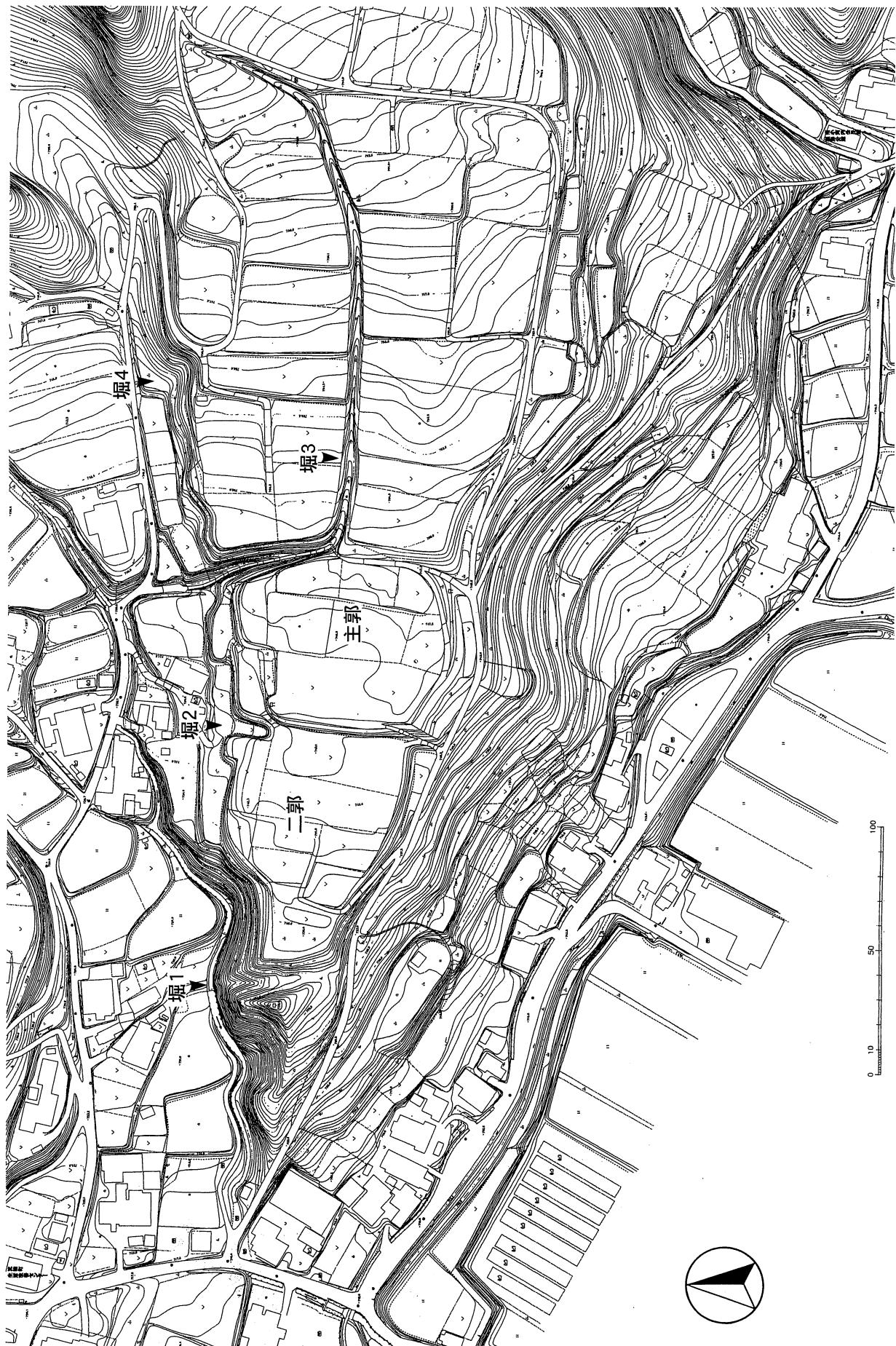
上ノ平城跡が位置する伊那谷は、諏訪湖から流れ出す天竜川によって形成された河岸段丘が発達した地域であり、この河岸段丘上には数多くの中世城館跡が分布している。戦国期に武田氏が拠点的城郭として築城した伊那大島城跡に代表されるこれら城館跡は、天竜川に面した崖と天竜川に流下する河川で浸食された崖を自然の防御として巧に利用しており、河岸段丘の先端に主郭を置き、堀切りで画されて曲輪が並列する縄張りを示すものが多い。伊那谷でも特に伊那市西春近では、構造的に酷似する城館跡が極めて近接して分布しており、最近の調査では各城館跡が水田（耕地）や集落などと密接に関連性をもちつつ、各々が有機的に機能したことが推測されている（註1）。信濃では、伊那谷のほかに田切り地形が発達した佐久盆地も城館発達地域として捉えることができる。これら2つの地域の城館跡には、伊那大島城跡や佐久金井城跡のように、段丘の最先端部に主郭を築き、堀で区画された曲輪が半円形に配置する求心構造のものと、佐久大井城跡や小諸耳取城跡のように不規則に曲輪が配置する非求心構造のものとに分類されるが、①主郭以外に土塁などの防御施設の付設が希薄である点、②城郭の外縁部が不明瞭な点、で共通している。周辺との比高差などから集落的要素が強く、居住機能を具備した城館と捉えることができる。縄張り構造が示す求心性の問題とかかる城館跡の性格をめぐっては、地表面観察を基礎とした縄張り論と発掘調査で蓄積される考古学的資料とを照合させた検討で明らかになると思われる。

史跡整備に伴う上ノ平城跡の試掘調査では、トレーンチ調査という限界性はあったものの地表面観察では全く判読できない貴重な資料が得られた。「城郭」としての上ノ平城跡の実態がうかがえたことはもとより、城跡の存続年代など従来の認識に再検討を迫る結果となった。

そこで本稿では、発掘から得られた考古学的資料をもとに、最近の発掘例を加味して上ノ平城跡を考えてみることとする。なお、城郭施設の名称であるが、今回主な調査対象となった曲輪を「主郭」、主郭先端の曲輪を「二郭」、二郭先端の堀切りを「堀1」、主郭と二郭を画する堀切りを「堀2」、主郭以東の曲輪を「三郭」・「四郭」と便宜上名称をつけて説明する。

2. 現況遺構と埋没遺構

地表面観察で確認される上ノ平城跡の現況測量図が第22図である。上ノ平城跡は天竜川の左岸に位置し、沢川、寺沢川、知久沢によって浸食された段丘地形に立地している。この段丘は通称御射山平から西方（天竜川方向）に向かい舌状にのびており、最も標高が高い城域東端と段丘先端とでは約30mの比高差がある。城郭施設は東西約290mの広範囲で確認され、段丘先端には竪土塁を伴い段丘を分断する大規模な堀切り（堀1）が掘削されている。この堀切り以西には主たる曲輪が存在しないことから、城域の西端を意味するものと理解される。上ノ平城跡を構成する曲輪は、堀1以東に展開している。上ノ平城跡の中核をなす主郭は、ほぼ正方形を呈し城域の中央やや西側に位置する。発掘調査時の地表面観察で北側と東側（痕跡）に土塁が確認されているため、主郭の最終段階は土塁に囲まれた構造であったと考えられる。主郭西側には切岸直下の堀切り（堀2）を画して二郭があり、曲輪の配置から主郭と



第22図 上ノ平城跡 現状測量図

二郭が主郭部を構成していたものと考えられる。主郭背後は東方に向かい緩やかに高まる地形で、主郭から離れるほど曲輪の標高が高くなる状況を示している（註2）。ここには段丘中央を堀切り（堀3）が横断しており、南北に2分される城域には広大な曲輪が階段状に展開している。南北方向の堀切り（堀4など）は、尾根上では不明瞭なもの斜面部で確認できることから、各曲輪は南北方向の堀切りで分断されていたものと推測される。さらに、堀3が北方へ屈曲する部分が城域の東辺と推測されるが、遺構や地形的差異で城郭の縁辺部を捉えることが困難で、段丘先端から離れるに従い施設が不明瞭となる伊那谷の城館跡特有の姿を示している。次に曲輪に付随する防御施設を見ると、主郭には土塁、尾根先端の堀1に豊土塁の付設があるものの、その他の施設では土塁が確認されない。最終段階の上ノ平城跡は、土塁の構築が主郭に限定されており、縄張り的には主郭とその他の曲輪とで構造の差異が明瞭にうかがえる。

地表面観察に残る遺構の形成時期についてである。寛永16年（1639）の『南小河内村御検知帳』（畠方）を見ると、遺跡が立地する字「上の平」の地目は「畠」となっている。地筆の現地比定は困難であるが、17世紀前半には現在の景観が形成されており、主郭・二郭などの曲輪面が耕作地として利用されていたことが分かる。調査では、表土または2期盛土から数点の近世陶磁器が出土したのみであり、14トレンチでは1期整地層出土遺物と2期盛土出土遺物が接合している。さらに主郭に残る土塁や堀切りの遺存状況から、廃城後に耕作などで大きく改変された痕跡はなく、現地表面を上ノ平城跡の最終段階の姿と捉えることができる。したがって、現況遺構が中世の段階に形成されたものと理解できる。

現在目にできる現況遺構の年代であるが、城郭施設に時代的特徴が認められず縄張りからの年代比定は困難である。ただし、尾根を分断する大規模な堀切り（堀1）と共に伴う豊土塁などは戦国期城郭の様相を示すことから、最終段階を戦国期と捉えられる。

次に地表面下で確認された埋没遺構（註3）についてである。今回の発掘調査（トレンチ調査）では現況遺構に先行する遺構もしくは整地に関して以下の情報が得られた。

- ①. 主郭縁辺（1、3、12、14トレンチ）で埋没した土塁が確認された（第8・11・14図）。
- ②. 土塁に伴う整地層が確認された。主郭南側の12トレンチでは整地層に伴う礎石が検出された。北側の14トレンチでは推定整地層が薄い炭層で被覆され、遺物が密集して出土し、水平分布を示した。整地層間での遺物の接合や整地層とそれを被覆する盛土出土遺物の接合が見られた（第11図）。
- ③. 主郭西側の埋没土塁の裾部と堀2（底部付近）から出土した瓦質の風炉が接合した。
- ④. 主郭西側の土塁開口部（虎口）では門跡と推定される礎石が見つかり、礎石周辺は被熱で赤色化し炭で覆われていた（第15図）。礎石直上には主郭内から二郭に面する切岸に向かい人頭大の礫が多量に投棄されていた（第15図）。
- ⑤. 曲輪内（3トレンチ拡張区）では、1.8m間隔の礎石建物が見つかった（第16図）。
- ⑥. 二郭の堀（堀2）は、覆土最上部が意図的に埋められて、上部は曲輪として形成されている。

今回得られた地表面下の情報を総括すると、主郭の埋没土塁、虎口（門跡）、礎石建物、二郭の堀（堀2）が意図的に埋められ、現況遺構が形成されていることが理解できる。

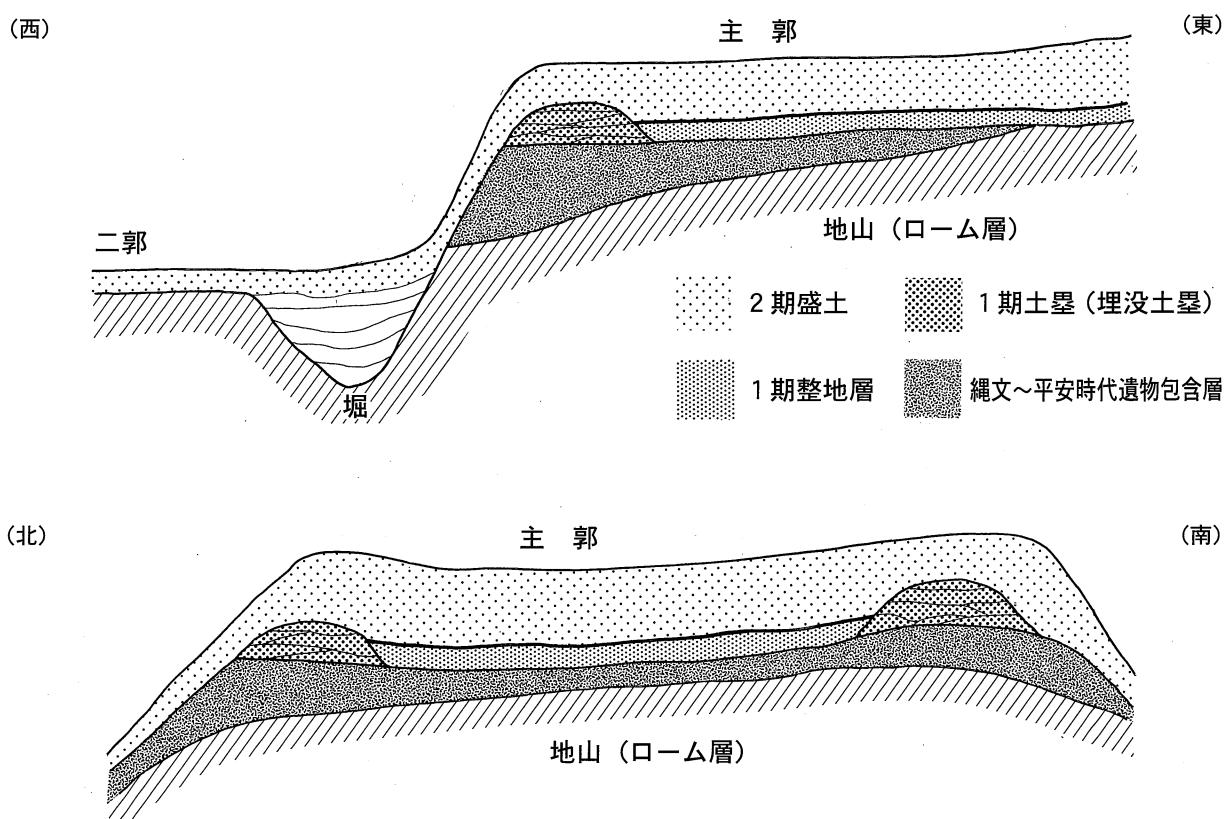
埋没土塁は主郭北側、西側、南側の3方で確認されている。東側は未調査で土塁の存在が不明であるが、現地表面の等高線で土塁の存在が推定されることから、土塁は主郭縁辺を全周する構造であったと推定される。埋没土塁に伴う整地層に限定して中世陶磁器片が密集し、主郭中央部の整地層には礎石建物が構築されている。土塁が開口する西側中央部の虎口は礎石構造の門を伴っており、門は周辺の被熱痕跡や薄い炭層の被覆から火災を受けて焼失した可能性が高い。虎口は門の焼失と同時に多量の礫の一括投棄で破壊されており、意図的に破壊した所謂「城わり（破却）」行為が行われている。さらに炭層の確認地点からすると、焼失範囲は虎口を中心とした主郭北側に限定される。

3. 埋没土壘の構造

ここでは、土層断面で確認された埋没土壘の構築方法や整地層との関連性について触れることとする。トレンチでは、ローム層と黒色土を盛り上げた互層状態が主郭縁辺に限定されることと、盛土最上部が整地層上面より上位であることが共通して確認された。筆者は「土もしくは土石混合により、曲輪の縁辺や堀の片側もしくは両側などに構築した防御的施設で、一定空間を区画する役割ももつもの」と土壘を認識している。したがって、盛土最上部と整地層上面との比高差がわずかであるが、これら主郭縁辺で認められた盛土を土壘と理解できる。

トレンチでは主郭のほぼ全域でローム層直上で縄文土器や石器、須恵器、土師器、灰釉陶器が出土する黒色土が確認された。中世以前の遺物包含層であるこの黒色土は、主郭中心部は築城に伴う削平で遺存状況が悪く、土壘直下の主郭縁辺で厚く堆積する。これを模式的に示したものが第23図である。上ノ平城跡が立地する尾根は縄文時代と平安時代に利用（集落か）されており、築城時の主郭造成にあたっては主に最高所の東側を削平し、発生した土を縁辺部の土壘の盛土や整地層に用いたものと思われる。黒色土が土壘付近で厚く遺存することは、土壘構築時には基本的に中世以前の地形に改変を加えず、縁辺部において大規模な削平を行わなかったことを示している。

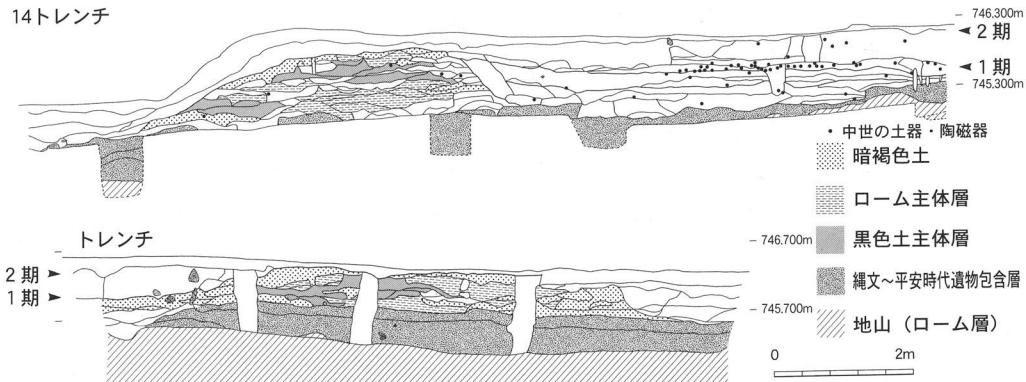
土壘は、①ローム土、②黒色土、③暗褐色土、以上3種類の土を盛土としており、盛り上げにある程度の規則性が見られる。構築状況が最も把握された主郭北側（14トレンチ）と南側（12トレンチ）の土層断面（第24図）から土壘の構築方法を推測すると、以下のようになる。まず黒色土上層をやや削



第23図 主郭の断面模式図



14トレンチ 埋没土層の断面図



第24図 埋没土塁の土層断面図

平し、土塁中央部にローム層を主体とした黄褐色土、周間に暗褐色土を盛る。次に黒褐色土を盛り上げ、周間に暗褐色土を盛る。最終的に暗褐色土を盛り上げ土塁が完成する。特徴的なことは、土塁の芯にあたる部分にローム主体層（土塁下部）と黒色土（土塁上部）とを交互に盛り上げていることで、土塁の基礎部分は主郭東側等での地山（ローム層）掘削で生じた土を意図的に用いて、土塁の基礎固めとして敲き締めていることである。最近の発掘例をもとに土塁の構築方法を、①搔き上げ土塁、②敲き土塁、③版築状土塁、④版築土塁、⑤混合土砂版築土塁、⑥削り残し整形土塁、以上6種類に分類した西ヶ谷恭弘氏の試案によると（西ヶ谷1994）、上ノ平城跡の土塁は「敲き土塁」に該当し、掘り上げた土砂をモッコ等で積み上げて敲きかためる最も一般的な方法で構築されている。なお、土塁構築と整地層の関係であるが、整地層が土塁盛土最下層に堆積しないことから、曲輪内の整地は土塁構築と同時もしくは土塁完成直後に行われたと思われる。主郭の造成は、まず土塁を構築し、その後に曲輪内を整地する構築順序が採用されたと理解される。

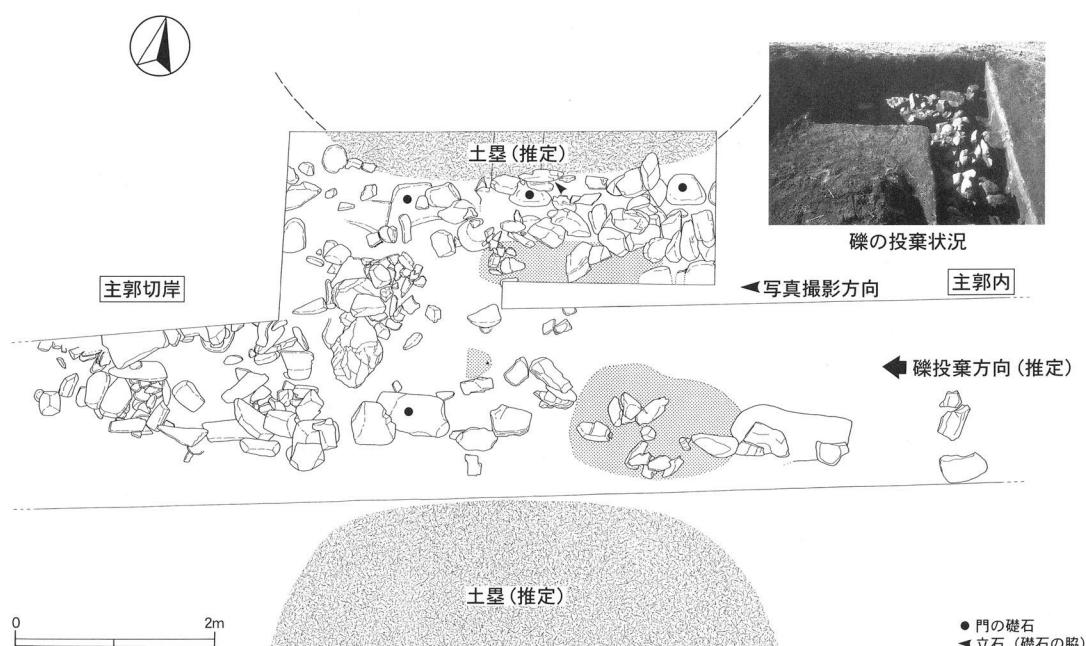
4. 磯石の門を伴う虎口の構造とその破壊

今回の調査では主郭西側縁辺の中央部で多量の礫が検出された。他地点で礫は全く確認されず、礫分布域は特異な様相を呈していた。ここではこの礫の解釈を埋没土塁等との関連で試みることとする。

礫は全体的に人頭大規模のものが多く、なかには径約30cmに達するものもある。容易に持ち運びができるものが散乱する点が特徴で、礫敷遺構または礎石建物とは明らかに様相を異にする。人頭大の礫間には、拳大の礫と埋没整地層を被覆する暗褐色土が充填しており、礫が主郭内から縁辺部に向かい傾斜する状況を呈していることから、投棄などによるものとの印象を強く受ける（第25図）。

調査では、この礫が埋没土塁の開口部に分布することと、レベル的に最高位の礫と埋没土塁はともに地表面下約10~15cmで露出することが確認された。虎口の詳細の規模と構造はトレンチ調査のため

不明であるが、土壘幅（下端）約5m、推定土壘開口部幅約3mの平虎口と推測され、礫はその分布から虎口に伴うものと判断される。さらに、礫の下層より3基が1列に並ぶ礎石と、礎石と土壘先端部裾部の間に扁平な石を立てた立石が認められた。石積みの有無で相違するが、礎石と立石は甲府市武田氏館（西曲輪）の北側枠形虎口の2号門跡と酷似する（数野ほか1999）。柱が直接立つ礎石上面のレベルを見ると、東側の礎石と西側の礎石とでは約26cmのレベル差が生じており、曲輪内の礎石が最も高く、曲輪縁辺の礎石は低くなっている。その傾斜は中世以前の遺物包含層である黒色土の傾斜と極めて一致しており、門の礎石は曲輪内から縁辺に向かい傾斜する虎口空間の地形に沿って構築されたことがうかがえる（註4）。礎石周囲の被熱痕跡と部分的な薄い炭層の被覆から、火災等により上屋が焼失し、それと同時に直後に曲輪内から縁辺部に向かい多量の礫が意図的に投棄されたと考えられる。このような類例として、福島県木村館跡がある。木村館跡Ⅲ区3号平場の枠形では、6基の柱痕が残る虎口に礫を投棄した状況が認められており（大越ほか1992）、千田嘉博氏によると虎口に石を籠めてふさぐ事例は宮崎県櫛間城跡でも見られているようである（千田1992）。虎口は曲輪や石垣と同様に城郭を構成する重要なパートであり、城郭において防御的施設または出入口として最も重要な虎口を意図的に破壊し、その機能を停止させることは、織豊期の文献史料に登場する「城わり（破却）」に該当する行為とみることができよう。戦国期における「城わり（破却）」の存在を示す史料はない。文献史料と発掘成果の対比で「城郭破却」の実態を論じた伊藤正義氏は、織豊政権はすでに存在した「城わり（破却）」を対占領地・服属地政策として取り入れたと指摘しており（伊藤1991）、この見解や最近の発掘例からすると、戦国期において城郭の破壊はかなり行われていたものと理解される。ここでは「（戦国期）城郭の全体もしくは曲輪・石垣・虎口など城郭を構成する主要な施設を意図的に破壊した痕跡が見られた場合、織豊期の「城わり（破却）」もしくはそれに酷似した目的をもった行為」との認識に立脚し、虎口の破壊を目的として投棄された礫と理解する（註5）。



第25図 主郭虎口の破壊

5. 主郭部の変遷

埋没土壘とそれに伴う整地層の存在や主郭西側での虎口の存在とその破壊など、今回の発掘で得られた資料から、主郭を中心に上ノ平城跡の変遷をうかがうこととする。

・中世1期

東から西方に傾斜する地形上に城郭を構築する。主郭は地形的に高まる東側を削平し、縁辺に土壘を構築する。東側縁辺（未調査）では現地表面の等高線で土壘状の高まりが見られることから、土壘は全周構造であったと推測される。これを示したものが第26図である。主郭は土壘が完成した後に曲輪内を造成し整地されている。土壘盛土と整地土は、主郭内や主郭隣接地における地山の削平で生じた土が用いられたと思われる。主郭虎口は西側中央と南側中央の2箇所に存在し、繩張りからすると二郭に面する前者が主要虎口であったと考えられる。主要虎口には6基の礎石で構成された門が設けられる。主郭西側の土壘裾部と主郭西側直下の堀2（底部付近）から出土した瓦質の風炉が接合したことから、堀は基本的にこの段階に掘削され、虎口直下付近に想定される土橋により主郭と西側尾根先端とが連絡されていたものと見られる。曲輪内は整地に伴い礎石建物が構築されている。検出された礎石建物の主軸と主郭の主軸が酷似することから、方形を呈する主郭の形状を意識して構築されている。出土遺物を土層に投影した主郭北側の14トレンチからは整地想定層からカワラケ、内耳土器、土壘盛土より内耳土器と青磁碗（15世紀中頃）が出土した。青磁は盛土上層の黒色土からの出土である。土器組成は内耳土器が圧倒的大半を占め、整地層内で接合したものもある。出土遺物と礎石建物の存在から、主郭は居住的機能を有した空間であったと理解できるが、トレンチ出土遺物を1期整地層下位と上層に明確に峻別できないため、1期の存続期間は不明である。主郭北側の整地層で見られた炭層や、主要虎口の礎石周囲で見られた被熱痕跡と炭層から、1期の上ノ平城跡は火災等により焼失し、主要虎口は意図的に破壊される。

・中世2期

現地表面に残る現況遺構が機能していた段階である。1期の主郭が焼失により機能が停止した後に、全周土壘や虎口が完全に埋没する状況となるまで厚さ約40cmの暗褐色土を盛り、北側は約1m、南側は約2.5m外側まで曲輪面が拡張されている。造成後に造成土と酷似する土を用いて主郭縁辺に土壘を構築する。北側と東側（一部）には土壘が構築される。なお、西側と南側については、土壘以外の防衛施設を用いたか、または後世の耕作等で土壘が削平されたかの2点が考えられる。主郭西側直下の堀は、覆土上層に主郭を造成した暗褐色土が堆積しており、2期の主郭造成時に埋められて曲輪として利用されたと考えられる。曲輪面の拡張と理解できる。二郭の造成時期は、未調査のため推測の域を脱しない。ただし、主郭の造成と堀の埋没は同時期に行なった可能性が高く、発掘で大窯Ⅰ期の丸皿やⅡ期の天目茶碗などが出土していることは、現況遺構が16世紀前半から中頃に形成されたと考えられる。17世紀以降の遺物の出土が極めて少ないことは、基本的に近世以降に改変を受けていないことを示している。

6. 上ノ平城の性格と築城主体者（推定）

地表面観察で確認される現況遺構から、上ノ平城跡の性格を考えてみたい。なお、今回の発掘で最終段階（2期）に帰属する遺構（考古学的資料）は未確認であることから、上ノ平城跡の実態解明は今後の発掘に寄与するところが多いことを前記する。

曲輪・堀等に付随する防衛的施設については前述した。上ノ平城跡では主郭と段丘先端の堀以外には土壘の付設がないことと虎口の不明瞭が特徴である。さらに曲輪縁辺等での「折れ」や、斜面部下方に



中世1期



中世2期

第26図 主郭部の変遷

のびる堅堀がなく、防御的機能が希薄な城郭の姿を示している。縄張り的に見ると、方形で土塁がある主郭と両側が堀切りと接する二郭は「城郭」としての要素を具備している一方、防御的施設が希薄で求心性が弱い主郭東側は、城郭としての認識が困難な場所である。主郭背後が上ノ平城跡に帰属する施設と考えた場合、主郭を中心とした主郭部が城郭として、背後に展開する広大な空間が集落的機能を有した空間と解釈でき、上ノ平城跡は両者とも居住機能を持ちつつ機能分化した異なる空間で構成されていたとの見方ができる。伊那谷には周囲との比高差や防御的施設の希薄さから集落的要素が強い城館跡が数多く分布し、発掘調査では堀で区画されたこれら広大な曲輪から掘立柱建物や堅穴建物、土坑などが多く検出されていることから、防御的施設を持った居住空間と認識される。これらを「城郭」と呼称してよいかは、発掘調査の増加による考古学的資料の蓄積と縄張り調査が進展した現在問われている「城」とは何か？という本質的な問題にまで行きつく。しかし、「『城郭』とは、広義にこれを解すれば、軍事的目的をもって構築された防禦施設である」（鳥羽1944）との確に述べた鳥羽正雄氏の概念からすると、上ノ平城は「城郭」に間違いない、「恒常的な居住空間で集落的要素を多分に含む防御的施設」と理解できる。

次に上ノ平城跡の年代と築城主体者について検討してみたい。

上ノ平城については市村咸人氏（市村1935）などの多くの調査・研究がある。市村氏は伊那源氏の祖、源為公が上ノ平に居館を構えたと指摘しているが、該期の遺物は出土していない。今回出土した遺物は大半が小破片で、帰属層位が明確なものは少ない状況であるが、時期判別可能な内耳土器や古瀬戸製品、大窯製品などから、上ノ平城跡の下限年代を16世紀代（16世紀前半～中頃）と捉えることができる。大窯Ⅱ期と思われる丸皿や天目茶碗もあるが、確実にⅢ期に入るものはない。最近の山城の発掘調査では、縄張りと出土遺物との年代観のズレが指摘されている（中井1992）。出土遺物が縄張りより古い様相を示すこのような事例は、山城が存続するなかで遺物が良好に残る利用方法と遺物がほとんど残らない利用方法とがあったと解釈されている。軍事的緊張状態でその機能や形が変わる山城ではかかる事例は考えられるが、上ノ平城跡のように防御的施設が付随する比較的恒常的な生活空間と捉えられる遺跡は、「遺物の時期＝存続時期」の等式が成立すると理解できる。したがって、上ノ平城の最終段階は大窯Ⅱ期と推定される。

箕輪町では箕輪城と福与城が文献史料に登場するが、上ノ平城は確認されない。そのためこの時期の歴史的事象を『高白斎記』・『妙法寺記』や『二木家記』・『箕輪記』などからうかがってみたい。

信濃では文明年間に在地武士の所領拡大をめぐる相互の争いが激化する。この頃、府中と伊那に本拠とした小笠原氏は対立し、さらに伊那小笠原氏は小笠原政秀（鈴岡城）と家長（松尾城）とで分裂し対立抗争をくり広げていた。また、伊那小笠原氏は笠原、知久氏らとともに諏訪惣領家（諏訪上原城）と大祝家（干沢城）との内紛にも関わり、文明年間の伊那と諏訪は紛争が絶え間なかった。明応年間に分裂していた小笠原氏は統一を成しとげたが、天文17年（1548）に塩尻峠で武田晴信と衝突するわけである。上ノ平城の時期は武田氏の諏訪盆地・上伊那侵攻の時期とリンクするため、武田氏侵攻の経過を文献史料等からうかがってみたい（註6）。

天文11年（1542）7月に武田晴信は諏訪に侵攻した。諏訪氏の居城上原城と桑原城を攻撃し、諏訪惣領家を滅亡させたことを皮切りに信濃進出を開始する。晴信は9月25日に連合して諏訪氏を攻撃した高遠頼継と安国寺門前の宮川で衝突し、頼継の弟頼宗など高遠軍7、800人が討ち死にした（信史11-187～188）。勝利した武田氏は、翌日に駒井高白斎が藤沢口（高遠周辺）に放火し、福与城の藤沢頼親を攻撃し降伏させた（信史11-190）。また、同月29日には板垣信方が上伊那口に出動し、残兵を掃討した。さらに、天文13年には甲府を発った武田晴信は有賀に着陣し、10月29日に上ノ平城の北方約2.5kmに位置し伊那谷最北部にある荒神山（砦）に陣取っている。11月26日には上原城へ着陣し、12月9日に甲府に帰っている。翌14年4月11日に晴信は甲府を発ち、14日に上原城に入っている。翌

日に上原城を発ち、杖突峠から伊那に攻め入り、18日に頼継が自落した高遠城に入っている。この際に晴信は上ノ平城の南方約3.7kmに位置する箕輪（福与城）城の藤沢頼親を攻撃したが（信史11-304）、『箕輪記』には福与城にたて籠もった松島・大出・長岡・小河内・福島・木下等百余騎、雜兵千五百人は武田側の攻撃を防いだ記載がある（信史11-305、306）。6月1日には武田氏は今川・後北条氏の加勢を得て、板垣信方が藤沢頼親の救援のために小笠原長時が入った竜ヶ崎城と福与城を攻撃し、両城とも落城している（信史11-307）。なお、6月10日に藤沢氏は武田氏と和睦したが、その際に福与城は放火されている。『高遠記集成』には、武田軍が有賀口より侵入して藤沢頼親等が籠もる福与城を攻撃し、その際に周辺の城も攻めた記載がある（註7）。

以上の状況から、武田氏の上伊那侵攻は高遠城の掌握が重要なポイントとなっており、上伊那最北部の荒神山（砦）も軍事的に重要視していたことがわかる。晴信は諏訪氏を滅ぼした天文11年から14年にかけて、甲府→上原城→杖突峠→高遠城と、甲府→上原城→有賀峠→荒神山（砦）の2種類を主な出撃経路として上伊那に幾度となく侵攻しており、天文14年には高遠城を手中に治め、藤沢氏との和睦で上伊那をほぼ掌握したことがうかがえる。武田氏は天文16年3月に高遠城の鍬立を行い（信史11-331）、織田軍侵攻で高遠城が落城する天正10年（1582）年までの期間、同城を拠点的城郭として伊那谷を支配した。

上ノ平城跡の出土遺物は、甲斐武田氏が上伊那に侵攻した時期もしくはその前後の時期を示している。今回のわずかな資料を歴史的事象に結びつけることはことは困難であるが、以下の2つの見方ができる。

第1は礫を多量に投棄しての虎口の破壊は、在地の武士を越えた戦国大名により為し得た行為との前提から、武田氏が1期の上ノ平城に放火した上で破壊し、その上部に2期の上ノ平城を築城したとの解釈である。第2は武田氏の侵攻などで生じた上伊那の軍事的緊張状態のなかで、在地勢力が1期上ノ平城の廃絶、2期上ノ平城の構築をしたとの見方である。前者は武田氏、後者は在地勢力が築城主体者となる。出土遺物の下限は大窯Ⅱ期であるが、資料的な限界から1期存続時期と2期存続時期を明確に捉えられなかった。各期の下限年代については、1期・2期ともに大窯段階、または1期が古瀬戸段階、2期が大窯段階であるかは、資料的な限界に起因して推測の域を脱しないが、武田氏侵攻段階の軍事的緊張状態により1期の上ノ平城が破壊されたと理解することはできよう。

本稿では、上ノ平城が武田氏の上伊那侵攻と密接な関係にあることと、大窯Ⅱ期以降に利用した形跡がないことを指摘し、最終的な判断は今後の発掘調査に委ねることとする。

7. おわりに

筆者は平成12年1月に上ノ平城跡の発掘を見る機会を得た。この厳冬期は天竜川上流から南方に向かい激しい風が吹く。現地では遺跡が立地する段丘上で激しい風に飛ばされそうになりつつ一層寒さを感じたことと、埋没土壘と虎口の破壊、堀の埋没などの発掘成果が一時寒さを忘れるほど強烈な印象を与えてくれたことを鮮明に記憶している。

上ノ平城跡は城郭を構成する基本的要素である曲輪や堀などが存在するものの、土壘などの防御的施設の希薄さから、積極的に城郭として認定が困難な状況であった。しかし、今回の発掘成果は上記の危惧を一掃するものであり、上ノ平城跡の年代や構造、機能（性格）など従来の認識を再検討する必要に迫られたことは間違いないだろう。

今回の調査は、県史跡で史跡整備という関係からトレンチ調査であり、得られた情報は断片的で自ずと限界はあった。その点で、得られた資料から遺構論・遺跡論を展開するには限界があるものの、城郭調査では断片的資料の照合でここまで推測可能であることを示せたと思われる。城郭をどのように発掘するか？、見つかった遺構をどのように解釈するか？、といった城郭の調査法に影響を与えたことが今

回の最も大きな成果であったと思われる。繰り返しになるが、本稿は断片的な資料をもとに遺跡、および検出構について解釈を加えたものである。上ノ平城跡の従来の認識を今回の発掘で再検討したが、次世代には新たな資料を加えての再検討が行われることを望みたい。かかる継承を経て徐々に上ノ平城跡の実態が次第に明らかになるものと思われる。

註

- 1 現在、伊那市西春近をフィールドとした上伊那教育会による中世城館跡の悉皆調査が実施されており、地表面観察で確認される城館跡個々の構造はもとより、発掘例や地名をもとに集落・耕地との関連性からこれら城館跡群の位置づけを行っている。城館跡を地域史解明の資料として位置づけ活用する意図をもった調査として意義深いものとして評価される。
- 2 上ノ平城跡は曲輪・堀の配置から、天竜川を望む尾根先端の西側が城郭の前面、標高的には高い東側が背後になると思われる。主郭が最高所に位置しない点が特徴であり、かかる様相は河岸段丘先端に主郭を築いた場合、普遍的に生じることである。
- 3 現地表面下で確認された土壘と整地層については、現況遺構のものと区別するために、これらを「埋没土壘」、「埋没整地層」と呼称する。
- 4 レベル差がある礎石の上屋構造については、今後の検討としたい
- 5 伊藤正義氏の「城を壊すことを、中世では破却・破城（城わり）・城割などといった。ごく単純にいえば、破却は上からの強制が、破城には自発的な色合いが、城割には城を整理して適正配置する、というニュアンスがある、といえようか。」（伊藤1993）からすると、上ノ平城跡で見られた痕跡は、「破城」に該当しようか。
- 6 『高白斎記』等の文献史料には、藤沢頼親が存城した場所として「箕輪」の名が登場する。現、箕輪町には天竜川の右岸に「箕輪城」が存在するが、本稿では「箕輪」＝福与城として解釈する。
- 7 『高遠記集成』はこの事象を天文16年としているが、天文14年の誤記と思われる。

参考文献

- 市村咸人1935「上ノ平城址」（『史蹟名勝天然記念物調査報告』第16輯）
鳥羽正雄1944「城郭の調査および研究法」（『郷土史研究法』）後に鳥羽正雄1980『日本城郭史の再検討』に収録
信濃史料刊行会1970『信濃史料』第11巻
信濃史料刊行会1974「妙法寺記」『新編信濃史料叢書』第7巻
信濃史料刊行会1974「高白斎記」『新編信濃史料叢書』第7巻
信濃史料刊行会1974「増補二木家記」『新編信濃史料叢書』第7巻
信濃史料刊行会1974「高遠記集成」『新編信濃史料叢書』第7巻
信濃史料刊行会1974「箕輪記」『新編信濃史料叢書』第7巻
箕輪町誌編纂刊行委員会1986『箕輪町誌－歴史編－』
長野県史刊行会1987『長野県史』通史編 第3巻 中世2
猿島町教育委員会1988『逆井城－第2次・第3次発掘調査報告－』
笛本正治1990『戦国大名武田氏の信濃支配』
伊藤正義1991「講和の条件－領域の城郭破却－」『帝京大学山梨文化財研究所報』第13号
中井 均1992「中世城館跡調査の成果と課題」『月刊考古学ジャーナル』N.O. 353
大越道正ほか1992「木村館跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告15』

- 千田嘉博1992「木村館の構成」『東北横断自動車道遺跡調査報告15』
- 小野義信1992「城館跡等に見られる土墨の覚書－菅谷館跡の土墨を中心にして－」『研究紀要』第14号
埼玉県立歴史博物館
- 伊藤正義1993「城を破る－降参の作法②」朝日百科 日本の歴史別冊『城と合戦－長篠の戦いと島原の乱－』
- 西ヶ谷恭弘1994「土墨構築法の編年化試験－関東の発掘成果事例を中心に－」『城郭史研究』第14号
- 小平・井口ほか1996～1998「伊那市西春近における中世城館跡群の研究」『上伊那教育会研究紀要』
第18集～20集
- 柴登巳夫1996「上の平城」『伊那谷の城』
- 河西克造1997「佐久地方における中世城館跡の特徴について（予察）」『佐久考古通信』No.69
- 河西克造1998「第7章 第4節 金井城跡検出遺構のまとめ」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 宮坂武男1998『図解 山城探訪－上伊那資料篇－』
- 数野雅彦ほか1999『史跡武田氏館跡IV』甲府市教育委員会
- 原 真2000「中世城館跡に見る版築土墨－関東地方の事例を中心として－」『研究紀要』18号 群馬県
埋蔵文化財調査事業団
- 宮脇正実「小井戸氏館跡」『信濃中世の館跡』信濃史学会
- 河西克造2001「信濃における戦国大名の城」『織豊期城郭研究会 第9回研究集会資料』
- 藤木久志・伊藤正義編2001『城破りの考古学』